



土井忠生先生を悼む

故広島大学名誉教授土井忠生先生は、あと十時間で満九十五歳のお誕生日をお迎えになるといふ平成七年三月十五日の午後三時四十分、八分に永眠された。先生のご逝去に対し、教室諸賢とともに心より哀悼の誠を捧げたい。

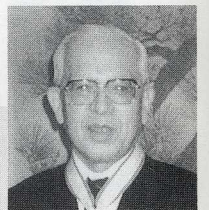
先生は、昭和四年四月広島文理科大学助教授に就任され、昭和十一年十二月同教授に昇任、昭和二十八年四月広島大学文学部教授に配置換えとなり、同時に広島大学大学院文学研究科五年課程における国語学国文学専攻国語学講座をご担当になり、昭和三十八年三月停年を迎えられるまでの間、三十四年の永きにわたって研究教育に専念された。高潔な人格と該博な学識をもって教育ならびに研究者の養成と指導に当たられ、多くの英才を育成され、その門下生が全国の多くの大学研究機関で活躍している。

また、広島大学ご在職中は、広島大学評議員、同附属図書館長として、大学の管理運営に多大の貢献をされた。さらに、日本諸学振興委員国語国文学部専門委員、学術奨励審議会委員、国語学会中国四国支部会長、国語学会名誉会員、日本学術会議会員など、数多くの役職を歴任され、学界の発展に尽力された。これらの功績に対し、昭和四十五年には勲二等瑞宝賞が授与された。

先生は二度のご訪欧によって、多くのキリシタン文献を日本の学界に紹介されるとともに、ご自身鋭意研究に専心され、キリシタン文献を中心とする日本中世語の研究に先人未踏の壮大な学問体系を構築された。とりわけ、先生が長年にわたってその完成に全精力を注がれた『時代別国語大辞典 室町時代語篇』三巻は、室町時代の言葉の「こころ」の歴史を室町時代に生きた人々の「こころ」の歴史として問いかけ、それを徹底して闡明された、まさに世界に類を見ない偉業である。それだけに、基礎から一つ一つの事実を身をもって確かめつつ研究を進めてゆかれたその行程は、決してなまやさしいものではなかったであろうと、私などにも推測することができる。長年にわたって私どもの心の支えであられた先生と、このたび幽明境を異にしたことはまことに悲しく、先生を惜しむの情まことに切なるものがある。

ここに、先生のみ霊が永遠に安らかならんことを祈念し、永訣の言葉とする。

文学部国語学講座 室山敏昭（むろやま・としあき）



名誉教授 福井憲二先生の御逝去を悼む

連休中の五月四日午後、福井憲二先生は福岡県にお住まいのご長男の自宅でお亡くなりになりました。連休中であつたこともあり、たくさんのご親族の方にみとられた安らかな最後とお聞きしました。

先生は、昭和十三年に大阪帝国大学理学部化学科をご卒業後、同学部の副主嘱託、講師嘱託を経て、昭和二十三年に大阪大学講師、昭和二十四年に富山大学富山高専教授、昭和二十五年に富山大学教授となられ、その後、昭和三十四年八月から、停年によりご退官された昭和五十一年まで広島大学理学部において研究教育にたずさわってこられました。

先生のご専門は有機合成に関するものであり、特に、フラボノイドやジテルペンなどの天然物の合成を通じて、立体構造の決定や新規反応の開発を行い、この分野に多くの業績を残されました。

また、在職中は日本化学会常議員、日本化学会中国四国支部支部長および代議員等の要職を歴任され、化学界の発展にも多大の貢献をされました。

先生とは、ご退官の年に卒業研究で研究室に配属となり、広島大学における最後の卒業生となったのですが、その一年の間には有機化学の面白さを教えていただきました。特に、分子モデルを片手に最終講義をされたお姿は今でも忘れることができま

せん。退官後は、広島市内の私学において教鞭をとるかたわら、パソコンに興味を持たれ、独学でプログラミングの勉強をされておられました。退官後も何度か元気なお姿を拝見し、パソコンの話をしていただきましたが、もうその話も聞けなくなつてしまいました。

どうか、安らかに眠りください。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げ、お別れの言葉といたします。

理学部有機化学講座 笛吹 修治（うすい・しゅうじ）